

## 7月10日(土)「キリスト教美術の魅力(春期)」質問への回答

質問をいただきありがとうございます。自宅を離れていて、資料が手元がないので、簡単なお返事しかできませんが、お許してください。

(質問)

◆キリスト教美術に直接関係は無いとは存じますが、マグダラのマリアについて、次の2点が理解できません

1. マリアは、なぜ聖人に列せられたのか。マリアは弟子であるにしても奇跡の目撃者に過ぎないのでは。

回答 マグダラのマリアはキリストの女弟子の筆頭にあげられ、使徒に準じる立場にありました。十二使徒が聖人であるのと同等に扱われるのは当然のことかと思えます。とりわけ、彼女がキリストの復活の証人となったことは、まさにキリストによってただ一人選ばれたのですから、それだけでも聖人に値するでしょう。

2. マリアが罪深い女や娼婦と紐付けられた理由があるのか。女性蔑視ゆえなのか。

回答 マグダラのマリアは講座でも述べたように、七つの悪霊をキリストから追い出してもらったとの記述があり、それが娼婦であったという言説の元になったと思われれます。また女にとって最も重い罪が自らの身を売ることとみなされたのかもしれませんが。ご質問にあるように、女性蔑視の視点(女は本来罪深い存在)ももちろんマグダラのマリアのあり方に含まれています。ジェンダーの問題については今回は扱わなかったのですが、興味のある方は岡田温司氏の『マグダラのマリア』を読んでいただくと良いと思います。

◆マグダラのマリアをハイブリッド化したのはグレゴリウス大教皇との事でしたが、それ以前には、マグダラのマリア、罪の女、ベタニアのマリアが独立して描かれていたのでしょうか。作例はあるのでしょうか。(検索してみたのですが、見つかりませんでした)

回答 グレゴリウス大教皇以前の現存する美術作品は多くないと思います。マグダラのマリアが表されるとすればキリスト伝の中にキリストの物語として表されるのだと思います。この時期について詳しくないので、推論しかできず、このようなお返事しかできません。なおマグダラのマリアのハイブリット化はカトリック教会だけに起きたことで、正教会でそのような混淆は起きませんでした。

マグダラのマリアの単独像の背景にラグーナが描かれている作品が多かったのですが、これは何か意味があるのでしょうか。たまたま作者がヴェネツィア出身だったからなのでしょうか。

回答 ラグーナの風景はマグダラのマリアをベネチアの高級娼婦に擬して描くことと関連しているかと思えます。またベネチアを背景に描くことによってイメージに現実感を与える意図もあると思います。祈念する観者にとっては、聖女が身近な存在と感じられたことでしょう。画家にとっては、現実の風景を魅力的に描く技量を誇るチャンスでもありました。

マグダラのマリア、というテーマからは逸れるので質問という訳ではないのですが、アンゲラン・カルトンのヴィル・ヌーヴ・デ・ザヴィニオンのピエタ、って私が学生の頃はアヴィヨンの画家の作品って言っていたような気がします。作者が特定されたのでしょうか。時の流れを感じます（黄金伝説の和訳が出てる事にもそう感じました！）

**回答** ルーヴル美術館の作品説明では、アンゲラン・カルトン帰属となっています。講座ではこの「帰属」を入れなかったのが、正確ではなかったかもしれません。正確にはアンゲラン・カルトンに帰せられるが確実ではないということです。訂正します。

**確かに『黄金伝説』も和訳が出てとても便利になりました。**

ルーカス・モーザーのマグダラのマリアの祭壇画に描かれた建築物は、ゼミでしごかれたメルキオール・ブルーデルラムのイーブルの祭壇画の建築物ととても似ている感じました。また中央の建物の屋根の模様がポーヌの施療院の屋根の模様ととても似ているのに驚きました。当時の流行なのでしょう。

**回答** ルーカス・モーザーはウルム出身です。ブルゴーニュのポーヌから南ドイツ(祭壇画のあるティーフエンブロンやウルム)にかけて色瓦で模様を描く屋根が高価な建築に使われていたと思われます。オーストリアのウィーン大聖堂にも、縞模様を描き出す色瓦が使われています。なお、モーザーについては本祭壇画にある署名以外その生涯についてはなにも分かっていません。建築の複雑で入り組んだ構造と不正確なパースペクティブは確かにブルーデルラムの〈ディジョンの祭壇画〉と似ていると思いますが、やはりほぼ半世紀後の作品なので、より写実的になっています。部分部分は現実の建物に即していると思います。プリミティブな表現という点では共通しているところが多いので似ていると言えるでしょう。一方海景など鋭い観察をもとに描かれていて、後期ゴシック様式からネーデルラント的な写実主義への移行がみられます。

ノリ・メ・タンゲレに関して、マリグダレーナのキリストへの愛が肉体のあるものから肉体を超えたもの霊的なものへと変化させていかななくてはいけない、せめぎあっている、というお話はとても切なく思いました。ノリ・メ・タンゲレの絵の見方にまた 1 つ違った引き出しを開けていただけたと思いました。

**私もノリ・メ・タンゲレが様々な複雑で微妙な意味を含んで表現されていることを今回学びました。単純なようで複雑な主題なのですね。**

ご質問にお答えしましたが、ご納得いただけたでしょうか。何かあればまたご連絡ください。荒木成子